第７２回「社会を明るくする運動」　調布市意見発表会　意見発表文

学校名	桐朋女子中学校
代表者氏名	犬飼　花己（いぬかい　なこ）
学年	３年
題名	社会を明るくする運動

本文

日本を表すとき必ず出てくる言葉が「おもてなし」だと思う。おもてなしにはいくつか種類があり，そのどれもが人々のサービス精神，優しさから成り立っている。

日本という国は外国から見てもサービス精神の旺盛な国である。それは日本人である私も感じていることで自国のおもてなしの奥深さやサービスには日々驚かされている。入店時のお冷からはじめ，身の回りにはおもてなしがあふれている。

１１月のはじめ，私たちの学校では文化祭が行われた。中学二年生で行えなかったため，私にとっては二度目となる。私のクラスは縁日をテーマに射的やわなげ，スーパーボールすくいなど数多くの接客を行った。もちろん接客をしたことがある人などクラスにはおらず，様々な工夫を凝らし最大限にお客様に楽しんでいただけるよう努めた。

それでも普段日本の接客技術を客側として目の当たりにしている私たちに

とっては１００パーセント満足のいくものにはならなかった。お待たせしている時間が長かったり，敬悟があいまいになってしまったり，失敗の連続だった。

だが，けして暗い気持ちにならなかったのは，お客様の温かい言葉があったからだと思う。優しく見守ってくださったり，小さなお子様への説明をより分かりやすくしてくださったり。時には「楽しかった」などお声をかけていただくことがあった。そのたびに自信を持ち，接客を行うことができた。

明るい社会のために必要なことはこのようにサービスをする側もされる側もお互いを尊重し，助け合うことなのではないだろうか。まれに，「お客様は神様」という言葉を耳にする。だが，それは提供する側の好意によるものであり，けして客が強要することではない。

加えて，サービスのほかにも社会には様々なルールがあり，暗黙の了解で決まっていうルールを人々は「マナー」と呼ぶ。マナーは地域や考え方によって変わるのでマナーを守る，ということは実はとても難しい。また，ただマナーを守っているだけでは社会は明るくならないと私は思う。ここで一つの物語をご紹介したい。ある王女様の優しさであふれた行動は果たして正しかったのだろうか。

ある日，王女様は晩餐会を開いた。そこには各国の有力者が集まっている。その中に一人の男性がいた。男性はとても緊張している。それもそのはず。

マナーを間違えると笑われてしまう貴族の社会だからだ。そんな笑いの的にされてしまう晩餐会で男性はあるマナー違反をしてしまう。手を洗うために出された水を飲み水と勘違いし飲み干してしまう。すると王女様もすかさず，その手を洗うための水を手に取り飲み干した。

この話でマナーを守っているのは誰だろうか。きっと手洗い用の水を飲まなかった人たちだと思う。では王女様の行動は間違いなのか。間違いではないだろう。これも一種のマナーとして考えられる。他国からやってきたお客様を「おもてなし」しているからだ。地域によっては手を洗う水など出てこないところもある。これはあくまでも例であるがどんな場合に臨機応変にやさしく対応できる人が増えるときっと明るく優しい世界が広がっていくのではないだろうか。

また，私はもう一つ大切なことがあると思う。それは反対の立場に立ってみることだ。私は文化祭の日まで接客をすることなどなかった。なので今まではすぐに料理等が出てきたりすることに毎度驚いていたりなどしなかった。だが，経験をすることで大変さを知り，すごさを体感することができた。

王女様の話も同様で男性の立場に立って考えてみると，もし王女様がそのまま何もせずにいたとしたらきっとただ恥をかいていただけだと思う。そこまで考え行動できた王女様はきっといての立場に立って考えることができる人だったのだろう。

　これらの話をまとめると社会を明るくするためには相手の立場に立ち，優しさを持つことが必要であるという結論になる。私はまだ中学生で日々たくさんの方と関わり，成長している段階だが，その一つとして日本の素晴らしい文化である「おもてなし」を次の世代にも伝えていきたいと思う。